

# いちばん研究、結果積み上げ

学会の主流から外れていた

「免疫反応を抑える」研究に打ち込み、長年にわたる不遇の時代を送った末に、自己免疫疾患やがんの治療法に新たな可能性を開いた大阪大の坂口志文特任教授(74)。共同研究者や部下は「研究に対していちばん『弟子の成長を見守してくれる』と口をそろえる。その研究成果は、今も同じ研究室で活動し、坂口さんが「同志」と呼ぶ妻で阪大招聘教員の教子さんとの「二人三脚」でこつこつと積み上げて

きたものだつた。

免疫反応抑制に興味を持つたのは、京都大大学院生時代に愛知県がんセンターのグループが発表した、自己免疫疾患に関する論文がきっかけだつた。「面白くない」と感じていた大学院を思い切って中退し、同センターの無給の研究生に転身。その後「研究を深めたい」との一心で米国の研究所を10年ほど渡り歩いた。

当時の免疫学の常識から外れた内容で、論文を酷評されたこともあつたが、自身は「苦

労した気はあまりしていな

い。誰が何と言おうと一つ一つ研究を積み重ねてきたといふ感覚だ」と振り返る。

教子さんは同センター在籍時に知り合い結婚。渡米先では、ほぼ2人で研究を進め

ていたという。器用な教子さんが細かい実験を、坂口さんが主に動物実験を担い、共著論文も複数ある。

坂口さんと25年にわたる親交がある同研究所の河本宏所長は「自分から率先して話をすることはない坂口先生に代わり、教子先生が社交的な部分を担っている。2人で息を合わせて研究を進めていた

生の学位論文の審査にも厳しく、科学に向き合う姿勢を常に問っていた」と指摘。同じ

研究室に所属する京大医生物学研究所の川上竜司特定助教は「先生はよく『角を矯めて牛を殺すようなことはしない』と話してくれる。教え子には細かく指示はせず、長い目で成長を見守るタイプだ」と明かす。

坂口さんと25年にわたる親

交がある同研究所の河本宏所

長は「自分から率先して話を

することはない坂口先生に代

わり、教子先生が社交的な部

分を担っている。2人で息を

合わせて研究を進めていた

と振り返った。